

非行少年と生活環境のかかわりについて

阿部千紘

1. はじめに
2. 非行少年の特徴と意見
3. 生活環境が少年に与える影響
4. おわりに

1. はじめに

私が非行少年と生活環境のかかわりについて興味を持ち始めたきっかけは、2022年2月25日からNetflixで配信されていた大韓民国のテレビドラマを視聴したことがきっかけである。題名は「未成年裁判」と言い、実在する少年法を題材にして、視聴者へ少年犯罪の実態を訴えかけるように描かれていた。私はそのドラマをなんとなく見始めたのであるが、リアルな描写に引き込まれた。特に「14歳未満は刑事責任を負わなくてもよい」ということを知っている14歳未満の非行少年が罪を犯してもなお笑うシーンが印象的で、14歳未満の小さな子どもに法律を逆手にとって悪事を働くという考え方が出来ること自体が恐ろしいと感じた。

また、この「未成年裁判」は韓国で実際に起こった5つの事件を題材にしていたため、韓国のSNSで大きく拡散され、多くの国民の記憶に残った。日本であれば、遺族のことを考え、ドラマ化はなかなかされないが、ドラマ化することによって事件を風化させないこと、また私のように人々が少年法や少年事件に興味をもつ良い機会になるのではないかと考える。このドラマを最後まで視聴してみて感じたことは、犯罪物語にも、法定物語にもなれるが、ホームドラマにも思えたことだ。少年犯の家庭、被害者の家族、青少年事件が一つ起きれば、どれだけ波紋が広がり、どれだけの人が苦しむのかという点が感じられた。このドラマでは生活環境が非行少年に与える影響がとても大きく取り上げられていたため、非行少年へ家庭環境が与える影響はどれほどなのか、検討していく所存である。

2. 非行少年の特徴と意見

(1)非行少年の特徴

非行少年の特徴としては、主に二つのパターンに分けられる。つっぱりや暴走など分かりやすいタイプと、これまで問題が目立たないいい子タイプだ。

前者は、攻撃が外へと向かう分かりやすい不良タイプであるが、保護者から放任されていたり暴力的な態度で育てられることが多い。そのため、褒められたり受け入れられたりする経験が少ないため、攻撃的で大人に対する不信感が強く、大人への反発や寂しさから気を引きたいという思いから非行に走ってしまうと考えられる。

後者は、一見何の問題もなく育ったいい子が突然事件を起こしてしまうパターンであるが、抑圧されているケースが多い。近年の凶悪な少年犯罪で時々見られるケースだが、親が厳しすぎたり、過度に構われたり逆に干渉が少ないことが原因で子どもの欲求や感情などを表したり、試行錯誤して失敗する中で学んでいくという経験が乏しくなってしまう。そのため、抑圧に耐えられなくなってしまった時や、体験したことのない挫折に直面した時に爆発して事件を起こしてしまうという事態が起きている。

(2)非行少年の意見

なぜ少年は非行に走ってしまったのか。それを知るためには少年の心理を理解することが必要であるが、少年院の子どもたちは「ちゃんと叱ってほしかった」と漏らすそうだ。多くの子どもたちは保護者から良いことと悪いことを教えられて成長していくので、悪いことをしたら当然怒られたり叱られたりすることを体験的に知っている。しかし、前述したように保護者が子どもを放任した場合寂しさから気を引こうとする少年も少なくない。

また、逆に保護者が厳しすぎた場合、「親から離れたい」という心情から非行に走ることもある。内閣府が行った非行に関する調査によると「親は家の中で暴力をふるう」「親から愛されていない」「親が厳しすぎる」と回答する少年は一般の少年と比べて多いという結果になっている。¹保護者に愛されていない、理解してもらえない、大切にされていないと感じることがきっかけで非行に至るケースが多いと考えられる。

3. 生活環境が少年に与える影響

家庭は、子どもが生まれ育ち、社会関係を結ぶ第一次的な社会化の場である。両親や道徳性の形成など子どもの社会化に課す家庭の役割は重要である。非行化の家庭要因の特徴として五つ挙げる事が出来る。

1) 単親家庭における家族の機能障害

1950年の調査では、終戦直後では、戦争によって大量に発生した貧困家庭、ひとり親家庭と両親のいない家庭が、子どもに対する親の躰、家庭不和、愛情の欠如と生活の不安定をもたらすとし、それを子どもが非行に走る原因であると考えた者が多かったが、時代を経るにつれて、その点が非行原因に重要なのではなく、家庭内における不適切な親子関係、家族間の不調和や葛藤、不健康な緊張状態、意思疎通の欠如などという人間関係の障

¹ 第4回 非行原因に関する総合的研究調査（平成22年5月内閣府）

<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/gaiyou/gaiyou.html>（2023年1月16日閲覧）参照。

害がもっと重要な非行原因として着目された。²つまり、非行少年は単身家庭や経済的水準の低い家族に比較的が多いが、その家庭自体が非行原因となるのではなく、そこで親子関係における問題がひき起こされたとき、そのことが非行化を促すということである。

2) 家庭の経済的水準の低さ

これについては二つの見方があり、その一つは家庭の経済的水準が子どもに「相対的欠乏感」をもたらした時、子どもはそれにより非行を動機づけられるようになるというものである。相対的欠乏感とは、「自分は他の大勢の人々とは違って、不当に差別された恵まれない状況にある」という感情であり、これは社会に対する敵を生み出しやすいとされている。もう一つは、経済的生活水準の低さが子どもへ無関心になる、放任、子どもの情緒的安定の無視など望ましくない親子の関係を導き、子どもの行動が統制されなくなるという見方である。

3) 家庭の文化的水準の低さ

家庭の文化的水準の低さは例えば社会的目標との隔絶遊び文化への志向に対する許容のように、逸脱した家庭の文化の中で育った子どもたちは普遍的な価値や生活様式、行動様式や思考様式など子どもを同調させることを困難にするため、自然に逸脱した行動を取りやすいと考えられている。

4) 親子間の交流の乏しさ、放任、父母に対する子どもの同一化の乏しさ

これらの要因は二つに大別でき、一つは子どもの内部にあって心理的に非行を抑制し子どもを遵守的社会に結び付ける絆として作用する要因であり、父母に対する子どもの同一化や愛着がそれにあたる。この程度が小さいほど子どもの行動は統制されにくい。もう一つは、子どもに対する放任、抑圧、子どもの情緒的安定への障害などであり、子どもに不満、悩み、緊張などをもたらし、それが非行を動機づける過程をたどって発生させる要因である。

5) 子どもに対する信頼や役割の欠如

子どもが適切な期待をかけられ、役割を与えられることは、子どもに自分の存在意識を認識させ、よい自己概念をもたらすことを通じて、その非行を防止すると考えられているためそれらの欠如は非行化への要因となりうる。³

² 金英淑「少年非行の原因としての家族関係」(現代社会文化研究 No.39、2007年7月)参照。

³ 総務庁青少年対策本部「青少年に関する調査研究等非行原因に関する総合的研究調査(第3回)」<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou3/html/html/mokuji.html#3-2> (2023

4. おわりに

以上のことより、非行の原因は一つではないが、生活環境の要因は非行を深刻化する可能性が高いと言える。きちんと子どもに向き合い、愛情を注ぐ。躰をしっかりと悪いことは叱り、その際に理由も説明することが大切である。子どもは大切にされていると感じ、適切な教育を受けて居たらむやみやたらに親を裏切らない。その面から、非行少年の多くは犯行時に親の顔が浮かばなかったと答えるそうだ。これは親と心の繋がりが希薄だと良心が育まれず、自己中心的な判断の結果非行に走ってしまうためであると考えられる。子どもを非行から守るために、子どもが保護者から大切にされていると実感できるよう、向き合って話を聞くこと、悪いことは叱り規範意識を育てることが重要なのではないだろうか。